

◎令和5年度長崎県議会議員研修会(概要)

- 1.日 時 令和5年10月24日(火)13時10分～14時10分
- 2.場 所 議会棟2階会議室
- 3.演 題 これからの教育と大学
- 4.講 師 長崎県立大学 浅田 和伸 学長(元 国立教育政策研究所長)

・文部科学省に入省し、途中で、自分で希望をして公立中学校での経験も3年ほどさせていただき、教育や教育行政への思い入れは相当強く持っている。

今日は県立大学の話だけではなく、今、あるいは今後日本の大学がどういう状況に置かれるか、そして大学だけではなくて小中高等学校も含めて、日本の教育が今どういう課題に直面しているかといったことについてお話をさせていただきたい。

○大学の使命、役割と少子化

- ・長崎県立大学は佐世保校と、長与町にあるシーボルト校の二つのキャンパスがある。
- ・学長として県立大をこれからどうしていくかということを考えるときに、いくつかの側面があると思うが、一つは、まず、大学としていわば一人前の大学であるために教育、研究、そしてそれをベースとする社会・地域貢献という面で、大学として評価されなくてはならないと思っている。同時に長崎県立という公立大学であるため、長崎県から、あるいは長崎県民からの期待に応えていくという責務を負っており、地域に対して教育研究の力を持って貢献していくとその両面をぜひ追求していきたいと思っている。
- ・この春入学してきた学生の県外出身者は47%。この春の卒業生の県内就職は大学全体では33%であるが、県内出身者は63%、県外出身者は6%であり、県内出身者は相当の割合で県内に残るが、県外出身者は残る率が非常に低いのが現状。県外出身者に魅力を感じてもらうために、情報提供など何通りかの方法をやっていないといけないと思っている。
- ・県立大は、全国100校の公立大学全体の学生数平均が1,500人程度に対し、3,000人ぐらいと、大体倍ぐらいの規模であるが、教員数は倍もなく、事務職員にいたっては公立大学全体の平均より少ないというのが実態。

- ・18 歳人口は今後、全国的に減少すると予測されるが、地域によってその減り方には差があり、九州は減り方が緩いが、長崎と佐賀は全国平均よりも減るという予測。
- ・我々は長崎にある大学であり、その中でどういうふうに学生を確保していくかということが必要になるが、大学が少ない佐賀県では、県立大学を作ろうという知事の選挙公約があり、また私立大学設立の構想もある。本学は佐賀県出身の学生も多く、このような状況のもと、本学に来てもらわなければならない。
- ・最近の大きな動きとして、公立大学の授業料を無償化しようという動きが急に出てきた。例えば大阪府や兵庫県では、住民を対象に、段階的に、公立大学の授業料を無償にすると発表した。東京都でも、収入条件がつくが、都民を対象に、授業料を全額又は半額免除するということが出てきている。つまり公立大学の授業料を無償にするあるいは安くすることによって大学で学ぶ機会を実質的に保障しようという動き。教育の機会均等の面から大きな流れとしてはいいことだと感じている。
- ・4 月の入学式で新入生たちに話したことが 3 点ある。一つは、高校までの学びとは違うから、意識と姿勢を切り替えてくださいと。授業を与えられるのではなくて、自分から取りに行かなきゃ駄目だよと。二つ目は、とにかく世界を広げてくださいと。今までの自分の経験とか知識、自分の考えだけにとらわれないで、いろんな立場の視点からものを見られるように勉強してたくさんの視点を持てるようにしてください。特に長崎には戦争の歴史もあります。歴史を学んでください。歴史を学ぶのが今と未来に生かすためです大学での教育や研究というのは人を幸せにするためのものですよと。三つ目に、人と比べない、それから人をおとしめないということをしませんかという呼びかけ。
- ・教職員に対しても、学長としての今の一番の任務は、18 歳人口が減る中で、大学を潰さないことだと思っていることを伝え、そのためには、あの大学は必要だと言ってもらえる大学にしなければいけないということ、それから教育研究・地域貢献・社会貢献・大学運営への協力といったことを皆さんにも求めますということ、学生ファーストで考え、特に県内でうちを選んでもらえるように、人気魅力を高めましょう、真面目に一生懸命やる部下や職員は全力で守りますと、という話をした。
- ・18 歳人口が減る中で、国全体からすると、やはりその大学の教育研究の質を落とさないことが課題となっている。また、施設をどうやって維持するんだということも非常に大きい課題。そして大学がちゃんと機能するようなガバナンス改革が求められている。

- ・また、学びの支援の充実も必要。これには奨学金など経済面での支援、障害を持つ、あるいは障害ではないけれども、何らかの特別な支援を必要としている学生への支援をどう保障していくかといったことも含まれる。
- ・国際化については、コロナ禍で相当ブレーキがかかってしまったが、とりわけ大学はグローバル化・国際化を進めなくてはいけない場だと思っている。まだ正直十分とはとても言えないというのが私の個人の感想であるが、やはりまだこれから頑張っていかなきゃいけないところかなと思っている。
- ・18歳人口は1966年の約249万人に比べ、2022年には約112万人に減っている。5年度の4年制大学入学者は112万人中64万人、専門学校まで含めると大体100万人ぐらいが入学している。
- ・これまでは18歳は減ったが、進学率が高くなっていたため、大学入学者の実数はそれほど変わらなかった。しかしながら去年1年間に生まれた子供が80万人しかいないことでもわかる通り、18歳人口はこの先さらに減り方が加速し、大学の質を保ちながら、存続経営をちゃんとやっていくということが、私も含めて、大学の経営者には求められている。客観情勢としては非常に厳しい経営環境だが、県立大はいつまでも県民から、あるいはもっと言うと国民から大学が必要だと、なくなってもらっちゃ困ると言われる大学であり続けたいしそうなるように努力をしたい。

○学校に何を求めるか、そのために何が必要か

- ・臨時教育審議会第2次答申で「不易と流行」というのがかなり強調された。つまり、教育には時代を超えて変わらない要素と、時代に合わせて変えていかなければいけない要素の両方がある。それは両方とも大事で、どちらか片方だけじゃ駄目ということ。
- ・教育の目標は決して知識と教養だけではない。人を育てるのが教育。単に知識と教養学科の点数を伸ばすことだけを目的としているものではないということを教育に携わる者は、忘れてはいけない。勉強も大事だけれども、勉強以外にも大事なことがたくさんある。それをひっくるめてやるのが、学校教育であり、教育なんだという姿勢を忘れてはいけないと思っている。
- ・今の教育の課題はたくさんある。いわゆる不登校がものすごく増えていることなどの他に、私はその前に日本中の人に知っておいていただきたいと思うのは、特別支援の対象になる子供がものすごく増えているという事実。本人が希望し、よりきめ細かい教育を受

けられる、それはいいこと。一方、それぞれに教員が必要になることから、子供の数が減ってる割に必要な教員数は減っていない。しかも、今教員になろうとする人の数が減っており、その結果、非常に教員が足りないという状況が起こっている。必要な手立てはやはり予算。本当に必要なんだということをやっぱり理解してもらわないと現場は苦しいと思う。

・教育というのは、子供たちの幸せな人生のためにある。生きる力とか主体的対話的とか何とかかんとか言うけれども、それらは全て子供たちの本当に幸せの星に繋がっているかどうかで考えるべきもの。

・これからの教育を考える上でキーワードになると思うのが、ウェルビーイングとステューデントエージェンシー。特にこのエージェンシーの考え方は、おそらくこれから少なくともしばらく教育のキーワードになるだろうと思っている。

※ウェルビーイング 個人や社会のよい状態

※エージェンシー 自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力

・社会全体のルール、法律、条例を守ることは大事だけれども、その内容自体が正しいんだろうか、妥当なんだろうかと考えて、もし違うなと思ったらそれはどうやったら変えられるんだろうと、全ての子供たち全ての住民がそういう意識を持つべき。

・子供たちのために良かれと思って作っている学校が子供たちにとっては苦しみの元になっているのであれば、それは仕組みの方を変えてやるべきというのが私の考え。

・集団の教育力はものすごく大きい。だから学校の先生方が集団での活動を通して子供たちを伸ばしてやろうと思う気持ちもよくわかる。集団の持つ教育力を生かすことと、やっぱりなじめない子がいるってということと、それを両立しなければいけない。そういう柔軟性というか、多様性というかそれが今の学校にちょっとまだ足りてないんじゃないかなと。そういうことが例えば不登校がものすごく多い、増えている、そういうことにも繋がってるんじゃないかなと感じている。

・とはいえ授業は、決められた時間の中、いろんな子供たちがいる中、不規則発言もある中ででもちゃんと進めなきゃいけない。普通の人にはできない。本当に難しい。学校の先生方はすごい難しい専門職。そのことへの敬意を持った上で応援してあげてほしい。単に教科の内容を教えるだけでもえらい難しいんだけど、さらに、相手の魂に火をつけて、その全人格を導くとなるともうこれはもう本当に至難の技。

・いわゆる課題が多い学校の校長を長く務められた方が、この 40 年間の学校の一番の変化は、学校で子供たちのことを議論しなくなったってことだと言っている。他地区のいい事例などの議論を、先生方同士でできるような雰囲気とか時間とか心の余裕とか、そういうのがきっと昔はあったんだろうなと。本来はそれを取り戻したい、それが教育力の源泉なんじゃないのかなということを思っている。・学長としての任期 4 年の 8 分の 1 が終わった。4 年の間にできるだけ早いうちに、たしかに県立大変わったねと言っていただけるように頑張りたい。県、県議会ははじめ、いろんな人の力をお借りしたい。

<質疑応答>

○中山議員

・今の小学校の子供や若者の学力面は平均より少し上位にあるが、自己肯定感が極端に低い。この要因がどこにあると考えるか。

○浅田学長

・今の子供たちを見ていて、自己肯定感や自信を持ててないと思う。一因としていちいち人と比べて、貶める、低くいうみたいなことが多すぎるように感じる。

・私は、わざわざ余計な人との比較なんかしないで、ちゃんと認めてあげる、評価してあげる、褒めてあげる、そういうことを増やしていかないと駄目だと思っている。それは学校でも、家庭でもそう。

・そのための一番ストレートなやり方は、できるようにすること。つまり、実際に力をつけてやること。実力も伴わないのに自信を持たせるんじゃなくて、ちゃんとそれに伴うように実力自体を伸ばしてやると、もうそこに尽きる。

・減点主義では自己肯定感や自信が持てない。能力に大差はない。だからこそ自信を持たせてやりたいし、もっとできるんだという思わせてやりたい。そのためには、何か活躍できその子らが評価されるような場を増やしてやりたい。県立大でもそういうふうにしていきたい。